



サビエルの「下関上陸」の絵

展示したサビエルのパネルの中に、長崎二十六聖人記念館にある内海静治という画家が描いた「下関上陸」の絵がある。

下関からは陸路で山口から岩国に向かい、そこから再び船で大阪の堺に向かった。堺から京都までの徒歩の陸路は雪だったというパネルもある。

山口では大道寺という廃寺を譲り受けて布

私が所属する下松カトリック教会ではここ数年、受洗者は一人もいないという現実と比べ、この数字がいかに驚異的かがわかる。

彼の活躍でヨーロッパ、とりわけ彼の出身地、スペインのナバラ

今、その道の上を歩いても彼らの足跡を全く忘れてる自分に信仰を語る資格はあるのかと反省せざるを得ない。

サビエルと山口 サビエル展を開催して⑥



天皇謁見は実現しなかった。応仁の乱以降、継続的に続く戦乱で京は荒廃し、天皇の権威が著しく失墜している。現実にはサビエルは失望し、十日で京を離れる。西の京」と言われた山口での宣教に方針を転換し、一五五一年四月に山口の大内義隆に謁見、宣教の許可を得た。



現在の山口サビエル記念聖堂の堂内

サビエルはこの後、いったんインドのゴアに引き返し、東洋での宣教には中国での宣教が不可欠と考えて中国に向かう。そして中国本土を目前にして上川島(サンシャントウ)で熱病のため四十六歳の若さで死去した。

結局、サビエルの日本滞在は二年余だったが、彼の影響を受けて、その後、大勢の宣教師が来日。一五八七年に秀吉がキリスト教禁教令を出したころには日本全国で約三十万人の信徒がいたと言われる。

サビエルのパネル展に出てきた県内の下関、山口、岩国、さらに次回紹介する二十六人の殉教者が京都から長崎に向かう途中に歩かされた下松の生野屋、花岡、周南の桜木、青山、徳山。そして防府、小郡など我々の身近にサビエルや二十六人の殉教者が実際に歩いた道がある。



イリサリ神父の墓